

登録販売者試験

問題集

令和8年版

九州・沖縄ブロック

(福岡・大分・宮崎・鹿児島・熊本・佐賀・長崎・沖縄)

◆厚生労働省「試験問題の作成に関する手引き（令和8年4月）」対応

目次

☑ 1. 令和7年度（2025年度）	問題	5
	正解&解説	49
☑ 2. 令和6年度（2024年度）	問題	59
	正解&解説	102
☑ 3. 令和5年度（2023年度）	問題	111
	正解&解説	151
☑ 4. 令和4年度（2022年度）	問題	161
	正解&解説	202
☑ 5. 令和3年度（2021年度）	問題	213
	正解&解説	255

公論出版

● 本書の使い方 ●

①本書は、各都道府県が行う登録販売者試験のうち、九州・沖縄ブロック（福岡・大分・宮崎・鹿児島・熊本・佐賀・長崎・沖縄）で実施された過去5年分（令和7年度～令和3年度）を、年度ごとに「問題」と「正解&解説」にまとめたものです。

②試験問題は、厚生労働省作成の「試験問題の作成に関する手引き」に沿って出題されています。なお、本書は「試験問題の作成に関する手引き」（令和4年3月作成、令和7年4月、令和8年4月一部改訂）を元に編集を行っています。令和7年度～令和3年度の問題文に「改」とあるものは、出題時の「試験問題の作成に関する手引き」から改訂された内容となり、編集部で試験問題を一部変更していることを表します。

③「正解&解説」には公表されている正解と、「試験問題の作成に関する手引き」を参考に編集部が作成した解説を掲載しています。

各問ごと、選択肢ごとに解説しているため、わからなかったり不正解してしまった問題は、解説の太字部分を参考に繰り返し解いていくことで苦手部分を集中的に学習できます。

また、関連する事項も合わせて学習し、対策することができます。

④公論出版ホームページ（<https://www.kouronpub.com>）、もしくは右記のQRコードから本書の解答用紙がダウンロードできます。マークシート式と記述式の2種類をご用意しておりますので、学習方法に合わせてご活用ください。



⑤本書の内容に訂正等が生じた場合には、公論出版ホームページにてご案内いたします。（<https://www.kouronpub.com>）



● 受験ガイド ●

1. 登録販売者とは

医薬品の販売業務は、薬剤師又は登録販売者でなければ行うことができません。登録販売者は、一般用医薬品のうち、第二类医薬品と第三類医薬品を販売できる資格です。

2. 登録販売者試験の受験資格

学歴、実務経験を問わないため、誰でも受験することができます。

3. 登録販売者試験について

● 試験地

①毎年通常1回、各都道府県ごとに実施されます。令和7年度は、以下の7ブロックで行われました。ただし、年度によりブロックが変更になる場合があります。

[北海道・東北] 北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島
[北関東・甲信越] 茨城・栃木・群馬・山梨・長野・新潟
[南関東] 東京・埼玉・千葉・神奈川
[北陸・東海] 富山・石川・岐阜・静岡・愛知・三重
[関西広域連合・福井] 滋賀・京都・大阪・兵庫・和歌山・奈良・徳島・福井
[中国・四国] 島根・鳥取・岡山・広島・山口・香川・愛媛・高知
[九州・沖縄] 福岡・大分・宮崎・鹿児島・熊本・佐賀・長崎・沖縄

②試験の日時・場所・申込方法等は、4月以降、各都道府県のホームページ等に掲載されます。

③どこの都道府県でも受験可能です(※)。また、1つの都道府県で合格すると、勤務地となる、どこの都道府県でも販売従事登録を受け、登録販売者として働くことが可能です。

※願書提出時点で当該都道府県に在住、通勤又は通学している人の受験に制限される場合があります。ご注意ください。

● 試験出題内容

厚生労働省作成の「試験問題の作成に関する手引き」から、各ブロックごとに試験問題が出題されます。

マークシート方式の筆記試験で、全120問（午前2時間で60問、午後2時間で60問）で、その内訳は次のとおりです。

試験科目	手引き	配点	試験時間
医薬品に共通する特性と基本的な知識 (20問)	1章	20点	午前 2時間 (120分)
人体の働きと医薬品 (20問)	2章	20点	
医薬品の適正使用と安全対策 (20問)	5章	20点	
主な医薬品とその作用 (40問)	3章	40点	午後 2時間 (120分)
薬事に関する法規と制度 (20問)	4章	20点	
合計 (120問)		120点満点	4時間

●合格基準

九州・沖縄ブロックにおける配点は、1問1点とし、以下2つの基準の両方を満たすと、合格となります。

- ①総出題数（120問）に対する正答率が70%以上（84点以上）であること。
- ②試験項目ごとの出題数に対する正答率が35%以上（20点中7点以上、40点中14点以上）であること。

●本書籍に関するお問い合わせ●

本書の内容でわからないことがありましたら、**必要事項を明記の上**、お問い合わせメールアドレス（inquiry@kouronpub.com）または右記のQRコードからお問い合わせください。



キャリアメールをご使用の場合、（inquiry@kouronpub.com）の受信設定を行ってからご連絡ください。

●必要事項

- ①書籍名（年版・地域など）
- ②該当ページ数
- ③お問い合わせ内容
- ④お客様の氏名とフリガナ

●お問い合わせに関してのお願い

- ・電話でのお問い合わせは、受け付けておりません。
- ・お問い合わせは、本書の内容に限ります。
- ・本書発行日から1年を経過した場合、内容のお問い合わせはお控えください。
- ・回答までにお時間がかかる場合がございます。あらかじめご了承ください。
- ・必要事項に記載漏れ等があると、お答えできない場合がございます。ご注意ください。

令和8年7月 編集部

〔医薬品に共通する特性と基本的な知識〕

問1 医薬品に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせを下から一つ選びなさい。

- ア. 医薬品は、人の疾病の診断、治療若しくは予防に使用されること、又は人の身体の構造や機能に影響を及ぼすことを目的としている。
- イ. 人体に対して使用されない医薬品は、人の健康に影響を与えることはない。
- ウ. 一般用医薬品として販売される製品は、製造物責任法（平成6年法律第85号）の対象である。
- エ. 医療用医薬品と比較すれば保健衛生上のリスクが相対的に低いと考えられる一般用医薬品であっても、科学的な根拠に基づく適切な理解や判断によって適正な使用が図られる必要がある。

	ア	イ	ウ	エ
1.	正	正	正	正
2.	正	誤	正	正
3.	正	誤	誤	誤
4.	誤	正	正	誤
5.	誤	正	誤	正

問2 医薬品のリスク評価に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせを下から一つ選びなさい。

- ア. Good Laboratory Practice (GLP) とは、ヒトを対象とした臨床試験の実施の基準のことである。
- イ. Good Clinical Practice (GCP) とは、医薬品の安全性に関する非臨床試験の基準のことである。
- ウ. Good Post-marketing Study Practice (GPSP) とは、医薬品の製造販売後安全管理の基準のことである。
- エ. Good Vigilance Practice (GVP) とは、医薬品の製造販売後の調査及び試験の実施の基準のことである。

	ア	イ	ウ	エ
1.	正	正	誤	誤
2.	正	誤	正	正
3.	正	誤	正	誤
4.	誤	正	正	正
5.	誤	誤	誤	誤

問3 医薬品のリスク評価に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせを下から一つ選びなさい。

- ア. 医薬品の効果とリスクは、用量と作用強度の関係（用量-反応関係）に基づいて評価される。
- イ. 治療量を超えた量の医薬品を単回投与した後には毒性が発現するおそれがあるが、少量の医薬品を長期投与する場合には毒性が発現するおそれはない。
- ウ. 投与量と効果又は毒性の関係は、薬物用量の増加に伴い、治療量上限を超えると、やがて効果よりも有害反応が強く発現する「中毒量」となり、「最小致死量」を経て「致死量」に至る。
- エ. LD50は、ヒトを対象とした臨床試験で求められ、薬物の毒性の指標として用いられる。

	ア	イ	ウ	エ
1.	正	正	誤	誤
2.	正	誤	正	正
3.	正	誤	正	誤
4.	誤	正	正	正
5.	誤	誤	誤	誤

〔医薬品に共通する特性と基本的な知識〕

問1 医薬品に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせを下から一つ選びなさい。

- ア. 医薬品が人体に及ぼす作用は複雑、かつ、多岐に渡り、そのすべては解明されていない。
- イ. 人体に対して使用されない医薬品は、人の健康に影響を与えることはない。
- ウ. 全ての医薬品は、科学的な根拠に基づく適切な理解や判断によって適正な使用が図られる必要がある。
- エ. 一般用医薬品の販売に従事する専門家は、随時新たに付加される医薬品の有効性、安全性等に関する情報の把握に努める必要がある。

	ア	イ	ウ	エ
1.	正	正	正	誤
2.	正	誤	正	正
3.	正	誤	誤	正
4.	誤	正	正	正
5.	誤	誤	誤	誤

問2 医薬品のリスク評価に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせを下から一つ選びなさい。

- ア. 動物実験により求められる50%致死量（LD₅₀）は、薬物の毒性の指標として用いられる。
- イ. 医薬品の投与量が治療量上限を超えると、効果よりも有害反応が強く発現する「最小致死量」となり、「中毒量」を経て、「致死量」に至る。
- ウ. 医薬品は少量の投与でも、長期投与されれば慢性的な毒性が発現する場合がある。
- エ. ヒトを対象とした臨床試験の実施の基準には、国際的にGood Laboratory Practice（GLP）が制定されている。

	ア	イ	ウ	エ
1.	正	正	誤	誤
2.	正	誤	正	正
3.	正	誤	正	誤
4.	誤	正	正	正
5.	誤	誤	誤	誤

問3 以下の試験のうち、医薬品毒性試験法ガイドラインに沿って実施される毒性試験として、正しいものの組み合わせを下から一つ選びなさい。

- ア. 薬物動態試験
- イ. 依存性試験
- ウ. 一般薬理試験
- エ. がん原性試験

1. (ア、イ) 2. (ア、ウ) 3. (イ、エ) 4. (ウ、エ)

〔医薬品に共通する特性と基本的な知識〕

問1 医薬品に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせを下から一つ選びなさい。

ア. 医薬品は、人の疾病の診断、治療若しくは予防に使用されること、又は人の身体の構造や機能に影響を及ぼすことを目的とする製品である。

イ. 一般的に、医療用医薬品は、一般用医薬品と比べて保健衛生上のリスクが相対的に低い。

ウ. 医薬品が人体に及ぼす作用は、複雑、かつ、多岐に渡り、そのすべては解明されていない。

エ. 専門家ではない一般の生活者においても、医薬品の添付文書や製品表示に記載された内容を見ることで、効能効果や副作用等について理解が可能であり、誤解や認識不足を生じることはない。

	ア	イ	ウ	エ
1.	正	正	誤	正
2.	正	誤	正	誤
3.	正	誤	誤	誤
4.	誤	正	正	誤
5.	誤	誤	正	正

問2 医薬品及びその販売に従事する専門家に関する以下の記述のうち、誤っているものを一つ選びなさい。

1. 一般用医薬品の販売に従事する専門家においては、有効性、安全性等に関する情報の集積により随時付加される新たな医薬品情報に円滑に対応できるよう、常に新しい情報の把握に努める必要がある。

2. 医薬品は、人の生命や健康に密接に関連するものであるため、高い水準で均一な品質が保証されていなければならない。

3. 一般用医薬品の販売に従事する専門家においては、購入者等が一般用医薬品を適切に選択し、適正に使用するために、専門用語を分かりやすい表現で伝えるなどの適切な情報提供を行うことが必要である。

4. 一般用医薬品として販売される製品は、医薬品医療機器等法の定めに従うため、製造物責任法の対象外である。

問3 医薬品のリスク評価の基準及びその内容の関係について、正しい組み合わせを下から一つ選びなさい。

リスク評価基準	内容
ア. Good Laboratory Practice (GLP)	— 医薬品の安全性に関する非臨床試験の基準
イ. Good Vigilance Practice (GVP)	— ヒトを対象とした臨床試験の実施の基準
ウ. Good Post-marketing Study Practice (GPSP)	— 製造販売後の調査及び試験の実施の基準
エ. Good Clinical Practice (GCP)	— 製造販売後安全管理の基準

1. (ア、イ) 2. (ア、ウ) 3. (イ、エ) 4. (ウ、エ)

〔医薬品に共通する特性と基本的な知識〕

問1 医薬品に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせを下から一つ選びなさい。

ア. 医薬品は、効能効果、用法用量、副作用等の必要な情報が適切に伝達されることを通じて、購入者等が適切に使用することにより、初めてその役割を十分に発揮するものである。

イ. 医療用医薬品は、一般の生活者が自ら選択し、使用するものである。

ウ. 医薬品は、人体にとって異物であるため、必ずしも期待される有益な効果のみをもたらすとは限らない。

エ. 医薬品は、科学的な根拠に基づく適切な理解や判断によって適正な使用が図られる必要がある。

	ア	イ	ウ	エ
1.	正	正	誤	誤
2.	正	誤	正	正
3.	正	誤	正	誤
4.	誤	正	正	正
5.	誤	誤	誤	誤

問2 医薬品に関する以下の記述のうち、誤っているものを一つ選びなさい。

1. 医薬品は、市販後にも、医学・薬学等の新たな知見、使用成績等に基づき、その有効性、安全性等の確認が行われる仕組みになっている。

2. 医薬品は、リスク区分の見直し、承認基準の見直し等がなされ、使用上の注意等が変更される場合がある。

3. 医薬品医療機器等法では、健康被害の発生の可能性の有無にかかわらず、異物の混入、変質等がある医薬品を販売等してはならない旨を定めている。

4. 一般用医薬品として販売される製品は、製造物責任法の対象外である。

問3 医薬品のリスク評価に関する以下の記述のうち、誤っているものを一つ選びなさい。

1. 医薬品の効果とリスクは、用量と作用強度の関係（用量-反応関係）に基づいて評価される。

2. 動物実験により求められる50%致死量（LD₅₀）は、薬物の毒性の指標として用いられる。

3. 新規に開発される医薬品のリスク評価は、医薬品の安全性に関する非臨床試験の基準である Good Clinical Practice（GCP）の他に、医薬品毒性試験法ガイドラインに沿って、毒性試験が厳格に実施されている。

4. 医薬品の製造販売後安全管理の基準として Good Vigilance Practice（GVP）が制定されている。

〔医薬品に共通する特性と基本的な知識〕

問1 副作用に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせを下から一つ選びなさい。

- ア. 一般用医薬品の販売に従事する専門家は、医薬品を購入し服用した者にどのような副作用が生じたとしても、医療機関の受診を勧奨する必要はない。
- イ. 病気等に対する抵抗力が低下している状態などの場合は、医薬品がアレルギーになることがある。
- ウ. 医薬品が人体に及ぼす作用は、すべてが解明されているわけではないため、十分注意して適正に使用された場合であっても、副作用が生じることがある。
- エ. すべての副作用は直ちに明確な自覚症状として現れる。

	ア	イ	ウ	エ
1.	正	正	誤	誤
2.	正	誤	正	正
3.	誤	正	正	誤
4.	誤	正	誤	正
5.	誤	誤	正	誤

問2 医薬品の使用に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせを下から一つ選びなさい。

- ア. 薬は多く飲めば早く効くため、定められた用量を超えて服用しても問題ない。
- イ. 人体に直接使用されない医薬品は、使用する人の誤解や認識不足によって使い方や判断を誤り、有害事象につながることもある。
- ウ. 医薬品の不適正な使用を防ぐために、医薬品の販売に従事する専門家が、購入者に対して、正しい情報を適切に伝えることが重要である。
- エ. 一般用医薬品には習慣性・依存性がある成分は含まれていない。

	ア	イ	ウ	エ
1.	正	正	誤	正
2.	正	誤	正	誤
3.	誤	正	正	誤
4.	誤	誤	正	正
5.	誤	誤	誤	正

問3 医薬品と食品に含まれる成分及びそれらの相互作用に関する以下の記述のうち、正しいものの組み合わせを下から一つ選びなさい。

- ア. 酒類（アルコール）をよく摂取する者は、肝臓の代謝機能が高まっていることが多いため、アセトアミノフェンなどで十分な薬効を得られない可能性がある。
- イ. 外用薬や注射薬は、食品によって医薬品の作用や代謝に影響を受けることはない。
- ウ. 服用中の医薬品の成分と同じ成分を含む食品を摂取することで、その成分の過剰摂取となる場合がある。
- エ. カフェインは食品に含まれていることはあるが、医薬品に含まれていることはない。

1. (ア、イ) 2. (ア、ウ) 3. (イ、エ) 4. (ウ、エ)